

## 「弟子の条件」(ルカによる福音書一四章二五〜三五節)

### 1 弟子

今日の箇所には「弟子」という言葉が、何回か出て来ます。そして、何々でなければ「わたしの弟子ではありえない」という言い回しがくり返されます。今日の箇所はイエスによるイエスの弟子論とでも言うべきところでは。

ところで、この弟子という日本語、弟のように、あるいは子供のように師にしたがい教えを受ける人という意味です。

ですから弟子は、たんなる生徒ではありません。それ以上です。親子のような、あるいは兄弟のような深い人間関係の中で、したがって多くの場合、生活を共にしながら、わざ、あるいは教えが伝えられていく、学ばれていく。その中で弟子たちが育ち、やがて後を継ぐものとなっていく。そんなイメージが、弟子という言葉には、あるように思います。

メシア・イエスの先駆者、洗礼者(バプテスマの)ヨハネにも弟子たちがいたことを私ども思い起こします。

どのくらいの人がいたのか、もちろん分かりませんが、イエスの弟子のほうが多かったと書いているところもあります(ヨハネ四・一)。

この洗礼者ヨハネの弟子たちも、いままじ申しましたように、師である洗礼者ヨハネとつねに行動を共にしていたと思われます。ヨハネがとらえられたときも、その深い関係は、途切れることはありませんでした。他の同じようなグループに比べてもかなり結束の強い、それだけに、どちらかと言えば、少し閉鎖的な集団ではなかったかと思えます。これはルカ五章ですが、そこに世間の人々の言葉として、こういうのが伝えられています。

人々はイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子たちは飲んだり食べたりしています」(五・三三)。

洗礼者ヨハネではなく、イエスの弟子でよかつたと思うために、この箇所を引いたわけではありません。

そうではなくて弟子たちの在り方・生き方は、そのままそれぞれの師の在り方・生き方を強く反映するものであつたことを確認するためです。

ここに言われているように、イエスの弟子たちはまさに「飲んだり食べたり」、奇異な感じを与えるほど、独特で目立っていたようです。ルカの五章のその箇所では、花婿がそこにいるのに、列席の者に断食をさせることができなると同じだと弟子たちを擁護しています。つまり、弟子たちの姿は、師の姿、在り方、を写し出すものであつたのです。

さて、このような弟子たちが福音書に出てくるときには、私ども、いつも教会を、

それに重ねて思い浮かべなければなりません。そのことは、これまでも何回も申し上げてきたことですし、あらためて、いまでも、そのことに注意を向けるべきだと思います。

ルカ五章に、ペトロ、ヤコブ、ヨハネが、イエスの最初の弟子として招かれたことが書いてあります。福音書はこうしてイエスが、その宣教のはじめに、弟子を招いたことを書いています。

その意味は、イエスは彼ら弟子たちなしに福音の宣教をしようとなさらなかったということですが、それはなぜでしょうか。神の国の福音の宣教が、いまイエスによって始められた福音の宣教が、その十字架の死のあと、教会によってさらに担われ、継続されていく、終わりの日まで救いの働きがなされていく、それをイエスがはじめから見越しておられたからです。

この事実は、私どもどんなに真剣に考えても、それで十分と言うことはないほど真剣な真理です。神は教会を、そして私ども一人一人を見込んで、永遠から選び分かち、この世にあつては信仰とともに聖霊をたまわり、神の国の宣べ伝えにあずかるようにと用いてくださる、これが神の御意志です。だれもが、たとえ自らの力弱くても、証人として用いられる、これ以上の人の幸いはないのです。

## 2 まことの弟子として

私ども、先週まで、三回にわたり、ある安息日の食事の会でのイエスの教えを学んできました。

その教えは終わって、食事の会が開かれた、あるファリサイ派の議員の家をイエスは離れたようです。離れると同時に「大勢の群衆が一緒に来て来た」（二五節）とあります。

何のために来て来たのでしょうか、そして彼らの思いは、どんなものであったのでしょうか。

大勢の群衆が集まってくる、それはガリラヤで伝道していたときもよくあったことでした。しかしそのときと少し違うように見えるのは、先週取り上げた、「大宴会の譬え」の最後のところ、イエスの言葉を、この群衆も、何らかの仕方ですらうと思うからです。

そこで人々が、漏れ聞いていたのは、神とおぼしき、宴会を催した主人が、招いていた人が直前になって断ったことに腹を立て、僕に、急いで町の広場や路地に出て行って、貧しい人や、体の不自由な人、招かれていなかった人を、連れてきなさいと言う命令でした。それでも、席は空いていて、主人は、町の外にまで行って、人々を無理にでも連れてきなさいと命じたのです。大勢の群衆は、われわれも招かれていると考えたのは当然です。民衆にこうして幸いをもたらすこの人こそ、自分たちの期待する救い主ではあるまいか、じつは内心、深く感じるところであったのではないかと思うのです。都エルサレムに上ろうとするイエスは、自分たちの味方であり、解放者であり、支配者ローマに抵抗の旗を翻し、抑圧する政治と宗教の権威からも救い出してくれる人と映ったのではないのでしょうか。

それが正しくないことは、イエスだけが知っていました。彼がエルサレムを目指したのは、民衆が期待するような救い主になるためではありませんでした。そうではなくて、十字架にかかって、すべての人の罪を贖うこと、そのような救い主として神の御心を行うためであったのです。

そのようなイエスに従い、そのようなイエスと共に、神の国の証しをするのにふさわしい人とはだれでしょう。イエスのまことの弟子とは、だれでしょうか。イエスはいま改めて語りかけるのです。

大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」(二五〜二七節)。

「振り向いて」という言葉は、ルカが、よく用いる言葉です。イエスは、この群衆に向き合います。そして問いかけるのです。

今日のはじめに申しましたように、今日の箇所には、何々なら「わたしの弟子ではありえない」という言葉が三回出てきます。これを目印に、私どもも読んでいくことができるように思います。

その二つが、いま読んだところにあります。一つ目は、こうです。「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」。この「憎む」という言葉を、ここで、何か感情的な憎しみをいなくという意味でとることはできません。

「あなたの父母を敬え」(第五戒)という戒めをはじめ、神から与えられた家族を積極的に「憎む」ように教えている箇所は、聖書にありません。そうではなくて私どもの信仰の歩みにおいて、神を第一にする、信仰を優先する、そのことをイエスは弟子たちに求めているのです。

もう一つ、「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ・・・わたしの弟子ではありえない」と言っています。同様の言葉を私どもすでに九章(二三節)でも聞いています。イエスのことを考えると、十字架を背負うということはへりくだりの極みです(フィリピ二・八)。何か社会的な地位とか、何か人間的に有利なものによって上に立とうとしたり、生きようとしないうこと、それは、神の前に、謙遜に、従順に歩むことを意味しています。

### 3 すべての人への招き

さて三つ目の「わたしの弟子ではありえない」という言葉は、三三節の終わりにあります。そしてこの言葉は、その前の二つの譬えを受けて、その結論としての言葉のようです。二つの譬えを先に見てみましょう。

あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、「あの人は建て始めたが、完成することはできなかつた」と言うだろう。また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めらるう（二八〜三二節）。

ここに二つの譬えがあります。一方は塔の建設に着手する人、他方は、戦いに出ようとすする王様の譬えです。ただ二つの構成や主旨は同じです。整理すると、三つの段階があります。第一段階として、二人とも最初、何かを企てています。一人は塔の建設です。もう一人は、戦いに出ようとしています。次に、それぞれの企てを遂行し切れるだけの費用が手許にあるか、それを考える、ということが来ます。そして最後の段階で、費用が足りないと分かったときのことで、当然、最初の企ては、中止するほかはありません。強行した場合、一方の人がこうむることになるのは、人々の「あざけり」です。他方の王様は「和を求め」ることになる、つまり降伏せざるをえないことになるということです。

譬えとは、ご承知のように、実際に起こったことを用い、真理を明らかにするものです。そういうことがあつた、群衆もよく知っていました。まさに迂闊（うかつ）なことをしてしまった人として、皆知っていたのです。

この塔というのも、いろいろの理解があるようです。一つは自分のぶどう畑の見張りのための塔です、それを建てようとして失敗したのです。戦をしかけようとした王様のほうは、譬えというより、「事実に基づかない」寓話のような趣もあります。迂闊で愚かな王様だということは、人々みんなの共通理解となっていたような人だと思えます。

こうしたことをイエスは持ち出して何を言っているのかといえば、結局、この二人のように、信仰の歩みも中途半端なものであつてはならないということです。「それはわたしの弟子ではありえない」。イエスに従う、しかし肝心なとき、肉親との関係が邪魔をしたり、何かしらこの世のものに頼ってしまう、神へと全身全霊を向けることがなかなかできなくなる。そうした人をイエスはここで、「自分の持ち物を一切捨て」ていない人にたとえています。信仰が実を結ぶにいたらず（八・一一以下）。塩気がなくなつた塩のようなものとして、外に投げ捨てられるほかはないのです。

まことの弟子として歩むこと、それは決して容易なことではありません。しかし私は今日の箇所を読んで、むしろ、私もイエスの弟子たちは、洗礼者ヨハネの弟子たちのような閉鎖的な集団でないことを感謝したいと思つたことでした。すべての人に招きが語られています。なるほど困難な道です。歩み切れなれないと思われることがあるかも知れません。しかしそれは悔い改めに開かれてある歩みでもあります。それが私どものイエスの弟子たち、教会の歩みの特色です。恵みに導かれ、御霊の助けにより頼み、共に歩んで行きたいと願っています。

（二二年四月三日）